バウハウス創設者ヴァルター・グロピウス
－ドイツ・イギリス・アメリカの足跡－

村 上　俊 介

はじめに
1．青年グロピウスーバウハウス設立までー
2．バウハウス校長グロピウス
3．バウハウス後のグロピウス

はじめに

1919 年から 1933 年まで、ヴァルター・グロピウス（1883-1969）によって作られたバウハウスは創設から閉鎖までワイマール共和国とまったく同じ時代を駆け抜けた。建築と芸術・手工芸の統合を設立理念としたこの教育機関は、各部門に手工業親方と芸術家を当てた二人マイスター制を採用し、専門教育の前に予備教育課程を設けるというユニークな教育システムを作り出した。教師陣の中にはライオネル・ファイニンガー、ワシリー・カンディンスキー、パウル・クレーといった前衛芸術家を配し、あるいは第二次大戦後にも活躍する多くの建築家を輩出した。しかもバウハウスは単なる教育機関にとどまらず、20 世紀における近代建築の理念と方法の発信基地であった。

1919 年から 1926 年までのワイマール時代、グロピウスとその協働者たちは、白壁と立方体による実験住宅「ハウス・アム・ホーン」を建て、1926 年から 1932 年までのデッサウ時代には建物側面をガラスで覆ったカーテンウォールのバウハウス校舎や、同様に外壁の装飾を一切排除した平屋根・立方体の組み合わせによるマイスター・ハウス、円形を建物に組み込んだレストラン「コーンハウス」と職業紹介所、あるいはテーテン低層集合住宅群などを次々と建築し、それらは現在ユネスコ世界遺産となっている。しかしバウハウスは保守派の反発によりワイマールからデッサウへ、さらにナチスからの弾圧によってデッサウからベルリンに拠点を移し、1933 年には閉校せざるをえなくなった。

創設者ヴァルター・グロピウスは、同時代ドイツのマルティン・ヴァーグナー、ブルーノ・タウト、オランダのリートフェルト、フランスのル・コルビジュエらと並ぶ、近代建築の代表的人物であり、ナチスの政権掌握後はイギリスを経てアメリカのハーバード大学で教鞭を執った。このグロピウスこそ、近代建築の理念と方法を、現実の作品だけでなく言葉で表現した人

物だった。

筆者はかつて、なぜナチズムがバウハウスを自らの体制の中に取り込むことをしなかったのか、について考察を試みた（村上 2007）。ワイマールにおける保守派のバウハウス排斥は、それほど難しい問題ではない。要するに新しいものを嫌う伝統主義の反発によるものであった。しかしナチズムの場合は一筋縄にはいかない。ナチズムはバウハウスの近代建築を、バウハウスの言葉を逆手にとって、無国籍の「住む機械」・画一的「集団性」として批判した。これは戦後の近代建築に対する批判と類似した、ある意味で核心を突いている。あるいはもっと広く近代合理主義に対する批判を先取りするものであるとさえ言えるだろう。しかし他方で、新たな技術や組織理念を取り込み利用してきたナチズムはなぜバウハウスをもっと利用しなかったのかという疑問もわく。イタリアのファシズムは近代建築と親和的だった。バウハウスのメンバーたちの側にもナチズムに利用される心の用意ができていた者はいたのである。筆者にとって、この点については、まだ理に適った解釈に至っていない。

この疑問を解く一歩として、もっと基本的な作業、すなわちバウハウスに集った数多くの人物たちについて、その思想を検討し、彼らの織りなすバウハウスの時代的特性をより明確に輪郭づける必要があると思われる。そのため、まず本稿では創設者ヴァルター・グロピウスについてその生涯を追い、彼によって特徴づけられたバウハウスの特性を明らかにしていきたい。その際、主に資料として用いるのは、Reginald R. Isaacs による "Walter Gropius, Der Mensch und sein Werk Bd. 1-2", 1983, Berlin である。著者のレギナルド・R・アイザークスは 1911 年カナダ生まれ。シカゴ大で社会学と都市計画を学び、1945 年にシカゴ都市再開発計画では、彼もこの計画の責任スタッフの一人となった。グロピウスはこの計画のアドバイザーとなり、マサチューセッツから何度もシカゴを訪れている。それゆえアイザークスとグロピウスは、グロピウスの亡くなる 1969 年まで親しい交流を続けることになった。アイザークスは 1953 年ハーバード大学の地域計画学の教授となっている。このアイザークスによる二巻本 1282 頁におよぶグロピウス伝の特徴は、彼とその関係者が残した手紙を中心に構成されており、その点でグロピウスの私生活にかなり深く立ち入ったものとなっていて、また一般にはどうしてもバウハウス時代のグロピウスの紹介が中心となるのに対して、この伝記ではアメリカでのグロピウスの生活が詳しく書かれているので、グロピウスの生涯を追うには最も適切な資料と思われる。

１．青年グロピウスーバウハウス設立までー

2004 年に出版された Gilbert Lupfer / Paul Sigel の "Gropius, 1883-1969, Propagandist der neuen Form" (2004, Taschen, Köln) の冒頭の一文は人の目を引く。「ほんとうは zeichen できないのに偉

大なキャリアを積む建築家ーコンピュータに助けられたデザインを行なう以前の時代に、それはほとんど考えられないのではないだろうか？」(S.7)。少し読み進むと、この一文を受けて次のような説明が続く。「グロピウスは彼の職業生活の間、彼の理念を表現する協力者を必要とした。というのも彼は zeichen することができなかったからである。しかし彼はそこから最良のものを作り出し、討議によるデザイン法を発展させた。プロジェクトは会話の中で生まれ、その中でグロピウスは決定的な基準を作る。他方、アドルフ・マイアーや、後にはカール・フィーガー、エルンスト・ノイフェルトら協力者は、そこからまずスケッチを書き、最終的に完成したプランを立てる。彼の個人的なハンディキャップから、彼が認めたチーム作業の意義も一部は説明がつく。」(S.8)

この場合、建築学では「zeichen」とは、プランを立てる際の大雑把なスケッチをすることなのか、それを製図に起こすことなのか、筆者にはよく理解できなかったのだが、文脈からすると、製図のことらしい。するとグロピウスは製図の引けない建築家ということになる。アイザークスのグロピウス伝を見ると、グロピウスはどうもスケッチの方も苦手だったことが分かってくる。さらに、「建築家」グロピウスは、実は正規の大学教育もほぼ 1 年ほどしか受けておらず、学業途中で実際の建築の仕事を始めている。大学教育を途中で投げ出し、スケッチ・製図のできない建築家グロピウス。にもかかわらず、彼は近代建築の旗手であり続けた。以下、彼の生涯を追っていく。

1883 年 5 月 18 日、ヴァルター・グロピウス Walter Gropius は、ベルリン市の建築技師ヴァルター・グロピウス Walther Gropius と、ユグノーを祖先に持つ母マノンの間に生まれた。彼の一族は両親の家系ともに中産階級に属していた。曾祖父の Johann Carl Cristian Gropius (1781-1845) は、解放戦争（対ナポレオン戦争）を兵士として戦い、ギリシャの総領事を経て、ドイツのギリシャ考古学会創立者の一人として名声を得た。彼は義兄とともにベルリンで絹織物会社を経営していた。

この曾祖父の兄（Wilhelm Ernst）が劇場技師（舞台背景、音響、ライト）だった関係上、プロイセンの建築家で、ベルリンに現存する多くの記念碑的な建物の設計者であり画家であったカール・フリードリヒ・シンケルの友人だった。まだ無名だったシンケルはよくグロピウス家（Ernst 家）を訪れて、ヴィルヘルム・エルンスト（曾祖父の兄）の息子に絵を教えたり、父親の仕事の技術を教えた。その息子たち 3 人は父親の仕事の後を継いで、シンケルの影響を強く受けた。

曾祖父の方は息子が 2 人いて、一人はマルティン・グロピウス（Martin Calr Philipp Gropius 1824-1880）、もう一人はカール・ルートヴィヒ・アドルフ（Carl Ludwig Adolf 1819-1871）、この後者がヴァルター・グロピウスの祖父である。前者、すなわちわれらがグロピウスの大叔父

にあたるマルティン・グロピウスは有名な建築家で、現在ベルリンには彼の設計した建物が「マルティン・ブロピウス・バウ」としてベルリンのポツダム広場近くのニーダーキルヒナー通りに現存している。工芸博物館として 1881 年に建てられたこの建物の隣には、ナチス時代ゲシュタポ本部があった。第二次世界大戦で大きな損害を受けたものの、原形はとどめたまま、1978 年から再建が始まった。もっともベルリンの壁沿いにあったので、統一前はそれほど整備がされていなかったが、統一後は整備されて各種展覧会場になっている。

祖父カール・L・アドルフは、将校退役後に弁護士となり、また農業経営者にもなって、ポンメルンに農地を持っていた。その息子であるヴァルター・グロピウス（Walther Gropius 1847-1911）が、われらがヴァルター・グロピウス Walter Gropius の父親であり、彼も建築家としてシンケルを信奉していた。この父ヴァルターには弟が 3 人おり、そのうち 2 人は長じてポンメルンやポーゼン（現ポーランド領）に土地を所有する農業経営者となり、いずれグロピウスが一人前の建築家になる際に大いに仕事の支援をすることになる。もう 1 人はイギリスで砂糖商人として成功した。

少年時代のグロピウスは、休暇中の外国旅行や親密な親類づきあい、観劇など、上層市民階級家庭の生活環境の中で成長し、1895 年から 1903 年までのギムナジウム通学の後は、建築家を志しミュンヘンの技術大学に入学した。しかし大学に入るとすぐ彼は 1 年間の兵役を志願し、学業を中断することにした。もっともそれを実行に移す前に、弟が重病に陥ったことを理由に入隊を延期し、ベルリンの実家に戻ってグロピウス家の知人の建築事務所で実習生として働き始めた。弟は 1904 年 1 月に死去する。1904 年夏、入隊を延期していた兵役に入り、翌 1905 年夏までハンブルグ近郊の部隊で 1 年間の兵役義務を果たした。ベルリンに戻ってベルリン技術大学に登録して、改めて学生生活を送ろうとした矢先、今度は農場経営者の叔父エーリヒから農場の諸施設建設の仕事が舞い込み、それに従事し始める。さらに 1906 年、再び大学に戻るものの、また叔父エーリヒから仕事を紹介されてそれに従事し、結局 1907 年に大学を辞めた。こうしてみると 1903 年から 1907 年までの 4 年間、兵役に 1 年間、建築事務所での実習生 1 年間を費やしているので、実際に大学に在籍したのは 2 年間で、その間も叔父エーリヒの直接の依頼や紹介で、農場施設や住宅の建設あるいは改装の仕事にかかりきりだったのであり、大学での断続的な勉強は長くて 1 年、短ければ数ヶ月だったと思われる。

グロピウスは大学を辞め 1907 年秋にスペイン旅行に出かけた。この時母親に宛てた手紙に興味深いものがある。1907 年 10 月 21 日付の手紙である。いわく「最も単純なものを書き留めることすらできない私の全くの無能力は、私の多くの良きところをだいなしにしてしまいますし、そのために私は将来の仕事への心配をしなければならなくなります。私は一本の直線をひくことができません。12 歳の少年の時の方が、もっと良く描く zeihnen ことができました。私には

それはほとんど身体的に不可能なことのように思えます。というのも私はすぐに手にけいれんが起こるからでして、絶えず力を抜いて、5 分後には休まなければならないからなのです。手書きの場合は、正にこのような状態です。手書きのものは日々駄目になっていきます。こんなに絶望的であることを、私の最も陰鬱な時でも私は恐れてはいませんでした。どうなることでしょう？」（Isaacs, S.91）

最初に紹介した「zeichen できない建築家」の実情はこのようなものであった。もっともこれが学業を中断した理由であるかどうかは分からない。このあと、グロピウスは建築家になることをあきらめず、逆に輝かしいキャリアを積み上げるのであるから。

さて 1908 年スペイン旅行から帰国したグロピウスは、ペーター・ベーレンス（1868-1940）のデザイン事務所にアシスタントとして入った。まだ 40 歳そこそこのベーレンスは 1907 年から大手電気会社 AEG の製品デザインや宣伝アドバイザーの仕事をしており、彼の仕事としては 1910 年の AEG タービン工場の設計が特に有名である。この事務所にはグロピウスの同僚として、その後、ワイマール・バウハウスの時代まで長らく彼の無二の協力者となるアドルフ・マイアー（1881-1929）、バウハウスの第三代校長となり学校存続に全力を尽くして果たせなかったルートヴィヒ・ミース・ファン・デア・ローエ（1886-1969）、そしてグロピウスの事務所退所後ではあるが、あのサヴォア邸あるいは上野の国立西洋美術館（基本デザイン）設計で知られるル・コルビジュエも短期間この事務所にいた。ベーレンスはグロピウスをイギリス旅行に同伴させるなど、かわいがったようだが、グロピウスは 1910 年に事務所を去り、同僚であったアドルフ・マイアーと共同で建築事務所を自ら設立した。独立直後からグロピウス親族の支援もあり、事務所は順調に運営されたようである。Isaacs は言う「グロピウスの建築事務所にとって都合の良かったのは、彼の叔父のフェリックスが 1903 年にあまり実入りの良くないポーゼンの農場を売って農業団体の事務局長になり、おかげで契約のための情報がすぐに手に入ったことだった」（Isaacs, S.118）。

この時期、グロピウスとマイアーは彼らのキャリアにとって決定的な仕事をした。アルフェルトにある木製の靴型を制作するファグス靴型工場（写真１）の建物である。ハノーバーとゲッチンゲンの中間に位置するアルフェルト・アン・デア・ライネはライネ川右岸の小都市で、川を挟んで左岸沿いに現在でも中小企業が点在している。工場はその一角にある。1910 年末、この工場建設計画を知ったグロピウスは工場主カール・ベンシャイトに猛烈な売り込みを開始する。ベンシャイトも、1911 年 4 月、ヴェストファーレンのハーゲン市で行われたグロピウスの講演「記念碑的な芸術と工業建築」を聞き、建設の一部、つまりファサードの改装を任せる気になった。すでに工場の設計図は別の建築家によってできていたからである。しかしグロピウスはベンシャイトを説得し、設計の根本から彼および A. マイアーの案を通させたのだった。

写真１　ファグス靴型工場　1911 年（筆者撮影）

1911 年末、その工場はアメリカの靴会社から融資を受けて完成した。この建物は作業棟と倉庫棟の基本部分からなり、特に作業棟は平屋根と側壁がカーテンフォールのデザインで、見る者は即座にのちのデッサウ･バウハウス校舎作業棟を連想するはずである。その意味で彼らにとって記念碑的な仕事であった（Weber 1961）。

グロピウスのキャリアにとってもう一つ重要な出来事は、1910 年にドイツ工作連盟に加入したことだ。1907 年に設立されたこの団体は、建築家や芸術家を糾合し、建築と応用芸術の新たな統合を目指すものだった。1914 年、連盟によるケルン展覧会準備の過程で、内部対立があった。連盟創設のイニシアティヴを執ったヘルマン・ムテジウス（1861-1927）が、このとき建築・工芸品の「類型化」を唱えたのに対し、自由な「芸術家は一つのタイプ（類型）や一つの基準を押しつけるような規律に従うべきではない」という反論が出たのである。グロピウスは当時すでに幹部メンバーとして活動しており、反ムテジウス・グループに属してブルーノ・タウト（1880-1938）やペーター・ベーレンスらとともにムテジウス批判急先鋒のアンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ（1863-1957）を支持した。このヴァン・デ・ヴェルデこそ、ワイマール・バウハウスの母体の一つである工芸学校の校長をやっていた人物であり、グロピウスがバウハウスを設立するきっかけを作った人物であった。

1910 年代の前半、すなわち青年グロピウスにとって、自らのキャリアを形成する基礎となったのがこの時期であるとともに、私生活にとっても重要な時期だった。グスタフ・マーラーの妻アルマ・マーラーとの出会い、さらにグスタフ・マーラーの死去と、第一次大戦のさなかの

アルマとの結婚である。

1910年、ベーレンス事務所を辞して独立したグロピウスは、間もなくして初夏にオーストリア・グラーツに近いトベルバードに静養に出かけ、ちょうどこの地に滞在していたグスタフ・マーラーの妻アルマ（1879-1964）と出会った。マーラー（1860-1911）より19歳も若いアルマはこのとき31歳、グロピウスは27歳になったばかりだった。そのとき、マーラーは夏の別荘トープラッハ Toblach（現イタリア・ドッビアーコ）で交響曲第10番を作曲していた。グロピウスはベルリンへ、アルマはトープラッハにそれぞれ戻り、二人の間に手紙のやりとりが始まった。この関係は、どういう意図かグロピウスがアルマに向けて書いた手紙を夫グスタフに宛てて直接出したことで、グスタフに分かってしまった。グロピウスはトープラッハに赴き、グスタフ・マーラーと直接面会し、話し合いの末、結局アルマは夫の元に留まることを選び、グロピウスはベルリンに帰った。とはいえ、このあとも二人は頻繁に手紙による熱烈な愛の交換をしている。グロピウスは7月、アルマに会うためにウィーンに行き、あるいはマーラーのミュンヘン公演の際に、同市へと赴いている。

同年11月、マーラーは当時ニューヨーク・メトロポリタン・オペラとフィルハーモニーの指揮者としてニューヨークに行くことになった。この時期も、ベルリンのグロピウスとニューヨークのアルマの頻繁な手紙のやりとりは続いた。だが1911年3月、グスタフ・マーラーはニューヨークで重い心臓病に倒れ、アルマはその看病に専念しなければならなくなった。彼女は、自分がいかに妻として看病に尽くしているかをグロピウスに書きつづり、かつグロピウスに愛の告白を繰り返している。一方グロピウスはこの時期にグスタフ・マーラーの偉大さを改めて認識し、自分の立場に対する迷いが生じていたようだ。1911年1月のアルマに当てた彼の手紙には次のように自分の気持ちを吐露している。彼はその1年前、アルマとともにミュンヘンでマーラーの7番を一度聞いており、改めてベルリンでそれを聞き、その直後にアルマに書き送ったものだ。

「今グスタフ・マーラー交響曲7番を聞いてきたところだ。私の印象を聞いてくれ。私は君にそうする必要があると思うからだ。私は道から投げ出されないで、自分の理想から追い出されないようにしがみついていなければならない者のように、見知らぬ土地に入り込んで驚いている者のように、混乱した気持ちだ。もちろん私はその様式、彼の完全なオリジナリティを再びすぐに理解した。しかし当時ミュンヘンでは、理解力が私の意識的な認識を助けてくれる以上に、私の胸中の感情のあまりに多くの流れが交差していた。今日は、私にはすべてが新しく貴重で、遠いよその国のタイタンが私を揺さぶり、その巨大な衝撃によって私を引き裂き、デモーニッシュなものから心を打つ無邪気さまで、心のあらゆるものに触れた。この作品の疑いを知らぬ向上心、孤独な求道が私を捉えた。…しかし私はこの初めての強さに恐れをなした。

というのも私の芸術は他の領域に現れるからだ。」(Isaacs, S.110)

マーラーはニューヨークからウィーンに戻り、1911 年 5 月 18 日に死去した。ここで未亡人となったアルマとグロピウスの間には、障害はなくなったはずだが、上記の手紙が暗示するように、グロピウスの気持ちはアルマから離れていたようだ。二人の関係が疎遠になり始めたとき、アルマはウィーンでオスカー・ココシュカ(1886-1980)と恋愛関係に陥った。間もなくこの関係をグロピウスは知ることになる。1913 年ベルリンでの展覧会で、ココシュカがアルマと自分を描いた絵をグロピウスが見た。おそらくその作品はココシュカの代表作「風の花嫁」に違いない。この若い画家とアルマの関係は2年あまり続いて1914年春に破綻する。時を置かず、グロピウスとアルマの関係が再燃することになる。

1914 年、第一次大戦が勃発しグロピウスは西部戦線に配属され、そこで偵察・伝令の任務に当たった。戦場から母マノンに送られる手紙は、彼が最も危険な前線で戦っている様子がうかがえる。事実、彼もまた戦時中には負傷している。1915 年の戦争のまっただ中、8 月 18 日、アルマの提案に応えたグロピウスは 2 日間休暇を取り、ベルリンで結婚式を挙げた。母マノンはこの結婚に反対だった。戦後には母マノンとアルマの関係は良好になるが、まだこの時期はグロピウスの母親はアルマを受け入れようとはしなかったのだ。戦時中ということもあり、グロピウスがウィーンに住むアルマに会えるのはクリスマス休暇くらいであり、すぐに慌ただしく戦場に戻っていくという変則的な「新婚」生活だった。

1916 年、アルマは妊娠をした。この時期、戦場のグロピウスとウィーンの華やかな社交界にいるグロピウス夫人ならざるマーラー未亡人アルマとの間にかわされる手紙の数々を読んだ『グロピウス伝』の著者アイザークスは、異次元の空間にいる二人の間の心のギャップを次のように指摘している。

「妊娠後の数週間、彼女は本当に生気を取り戻し始めた。明らかに感情の横溢を喜んだだけでなく、さらに子供が夫を自分に近づけるだろうと思って喜んだ。しかし彼女は自分の結婚を公けには隠していたし、自分の妊娠について何も公表しなかった。彼女の手紙の内容も何ら変化がなかった。彼女は相変わらず友人のこと、買い物旅行のこと、音楽、自分をうやうやしく表敬訪問しプレゼントを捧げる音楽家と指揮者のこと、自分たちの結婚の状態、ココシュカに対する軽蔑のこと、新しいことといえば二つのテーマ、すなわちまだ気づかれない妊娠のことと、子供が自分に与えてくれるだろう幸せについて、だった。彼女のグロピウス宛の手紙の中で、戦争についてまったく触れていないとしても、それは少なくとも少しの間、彼の目をそらせ、他のことを考えさせるためという彼女の意図があると説明できるかもしれない。しかしもしそうだとしても、なぜ彼女は手紙の中に、そうした心遣いや考慮を入れなかったのかという疑問が残る。というのも彼女が書くことは、一般的には彼の気持ちを高めたり彼に慰めを与え

るには適切ではないからだ。」（Isaacs, S.159-160）

グロピウスは戦争の前線で死の危険と隣り合わせの状態の時、彼女は愛について、彼が自分に誠実であるかどうかについて、手紙を書き、またグロピウスが戦場で、いっときの平和な空想に遊び、例えば彼女の家の増築を考えて、そのアイディアを手紙で送ると、即座に「彼女からは嘲笑的な長広舌ばかりではなく心底の発作的怒りの返答をしているのである。」（Isaacs, S.160）

1916 年 10 月、アルマとグロピウスの間の子供が産まれた。女の子で名前はマノンと名付けられた。マノンが産まれて一年後、アルマはグロピウス不在のウィーンで彼女より 11 歳年下のフランツ・ヴェルフェル（1890-1945）と恋愛関係に陥った。間もなくアルマはヴェルフェルの子供を妊娠した。1917 年のクリスマス休暇でウィーンに戻ってきたグロピウスは、アルマに常に付き添うヴェルフェルと対面することにはなるが、当然妊娠のことは知らされなかった。翌 1918 年春、グロピウスは戦場で負傷し、野戦病院からウィーンの戦時病院へ移されたので、この年の 8 月にひどい難産の末に瀕死状態で産まれた男の子マルティン（翌 1919 年 5 月死亡）とアルマを見舞うことができた。しかしそこでグロピウスは生まれた子供が自分の子供ではなくヴェルフェルの息子であることを知った。

1918 年 8 月のこの時点でのグロピウスのショックは容易に想像できるが、彼が離婚するのは 1920 年 10 月のことである。その間に、グロピウスはワイマール・バウハウス設立のために奔走しており、アルマと娘マノンをワイマールに呼び、一度は夫婦関係をやり直そうとしたかに見え、このあたりの彼の心情は不明である。結局、ウィーンと比べれば、地方の小都市ワイマールでの生活はアルマには耐えられなかったのだろう。彼女は娘とともにすぐにウィーンに帰り、二人は離婚し、アルマは 1929 年にヴェルフェルと結婚した。

1935 年、アルマの手元に置いたグロピウスの娘マノンは小児麻痺にかかり、死去。1938 年ナチのオーストリア併合により、アルマとヴェルフェルは、ヴェルフェルがユダヤ人であったため、フランスに逃れ、さらにこの地もドイツ軍に侵略されるに及んで、かろうじてマルセイユからアメリカに亡命することができた。ヴェルフェルはアメリカで小説家として知られるようになるが、1945 年に世を去り、アルマが一人残されて 1964 年に他界した。

1918 年 8 月にグロピウスがアルマとヴェルフェルの抜き差しならない関係を知ったときから 3 ヶ月後、戦争は終結し、ドイツは共和制を宣言した。これを前後する時期、私生活上の泥沼の中でグロピウスはワイマールにバウハウスを設立するために奔走をしていた。

２．バウハウス校長グロピウス

1910 年から 1919 年の 10 年間はグロピウスにとって疾風怒濤の時代だった。自らの建築事務所を構えて独立し、アルマ・マーラーと出会い、ドイツ工作連盟で活動し、第一次世界大戦の前線で戦うという状況の中で、さらにワイマールのバウハウス設立に向けた活動も同時に行っている。

バウハウス設立に関しては、ドイツ工作連盟で知遇を得たアンリ・ヴァン・デ・ヴェルデがきっかけであった。彼は 1906 年に設立されたワイマールの大公立工芸学校校長であった。しかし第一次大戦中の 1915 年 4 月に辞職を求められ、学校も同年 10 月には閉校と決まった。彼がベルギー人であったことや、財政難が原因と思われる。彼は辞職の際、その後継者候補の一人としてグロピウスを内閣に推薦し、戦場にいたグロピウス自身にもその旨の手紙を書き送った。これに対して、グロピウスは引き受ける旨の返答をした。

1915 年 9 月、工芸学校の向かいにある芸術大学の学長フリッツ・マッケンセンからも、工芸学校校長に推薦したい旨の手紙が届き、これにもまたグロピウスは応諾の返事と履歴書を送った。ただしマッケンセンとの手紙のやりとりで、彼が芸術大学の下部に建築学部門を置きたいのか、それとも独自の建築大学設置を考えているのか、要領を得ないものであった。グロピウスはこれに対して、「私が欲しいのは、Hochschule への合併のやり方と、建築学校の自立に関する積極的な提案です。私は‥‥‥建築教育が、何か下部の部門であることを予想することはまったくできません。というのもそれはすべてを包括するものだからです。私は、私の理想によってのみ－本質的な点で－有益に働くことができるでしょう。行動の自由がはっきりとした条件でなければなりません」（1915 年 10 月 19 日付グロピウスよりマッケンセン宛の手紙、Isaacs, S.151）。要領を得ないマッケンセンに対して、グロピウスははっきりとした「行動の自由」を求めることを表明し、二人のやりとりは途絶えた。しかし、ここで問題となっているのは芸術大学の下部であるにせよ、独立したものであるにせよ、工芸学校の代わりに建築学校が話題になっていることである。

1916 年 1 月になって、ザクセン＝ワイマール＝アイゼナハのヴィルヘルム・エルンスト大公と宮廷長官フォン・フリッチュ男爵から、建築・工芸学校についてのグロピウスの意見を直接具申するよう要請が来た。グロピウスは前線からワイマールに赴き、大公や男爵の前で彼の構想を開陳し、それを補足した文章をそのあと提出した。それによると、彼の構想する学校とは、「工業、小規模工業、手工業のための芸術上の相談所としての教育施設」であり、手工業親方や工場主の下で働いている若者の研修の場としての学校である。しかもこの学校では「学生は自分の仕事の材料を作業場から自分で学校に持ってくる。しかもそれは彼の親方の、当該現場

Betriebにおける現時点でのアクチャルに定められた課題という形式で持ってくる。…そして学生は学校の設計アトリエで教師の指導の下で細部までの形を製図として完成させ、彼の親方の作業場へ仕上げのために帰る。学校の教師たちは、同様に個人的に作業場や工場を訪れ、…新しい技術的な試みのために刺激を与え､持続的に現場Betriebの指導者と密接な連携を維持する。技術的予備知識は持っているが、充分な製図の教育を受けていない学生のために、別の製図クラスが設けられる」(Isaacs, S.154)。このような形で、「芸術家と商人と技術者の活動共同体Arbeitsgemeinschaft」が形成されるのであり、それは中世の作業場（ヒュッテ）をモデルとしている、と彼は述べたのであった（利光功、27 頁)。しかし、グロピウスの提案は送り返されてきた。戦時下では､新たな建築･工芸学校設立計画は困難であるというのが当局の意見だった。

1918 年末、状況が急変する。第一次世界大戦が終結し、同年 11 月のドイツ皇帝退位とともに､ザクセン＝ワイマール＝アイゼナハ大公国ヴィルヘルム･エルンスト大公も退位し､翌1919年 7 月にはチューリンゲン国民議会が暫定的に招集されることになる。この大公退位から国民議会の招集までの数ヶ月間、共和国臨時政府と宮廷の間の権限移行期であった。この時点で、くだんの大公立芸術大学や工芸学校はまだ宮廷長官フォン･フリッチュ男爵の管轄下にあった。1919 年 1 月末、ドイツ工作連盟ケルン展覧会で知り合い、当時ワイマールの劇場監督になっていたエルンスト・ハルトからグロピウスに、工芸学校の件はフォン・フリッチュ男爵と交渉をするように助言の手紙が来た。この助言を受けてグロピウスはフォン・フリッチュに手紙を書き、戦時下で議論となった新たな学校設立の意向と、グロピウス自身の意欲をアピールした。ここからこの問題は急展開する。グロピウスは芸術大学とすでに閉校となっていた工芸学校の併合を提案し、これが宮廷庁によって承認され、2 月 28 日グロピウスは､『かつての芸術教育のための大公国 Hochschule と、かつてのワイマール大公国工芸学校の合併と新設のための1919/1920 年の予算提案』を提出することができたのである。3 月 16 日に宮廷庁はグロピウスの新たなコンセプトに同意し、さらに 3 月 20 日、芸術大学教授会が臨時政府にあてて「建築家グロピウス氏の統一芸術大学･工芸学校の新命名“ワイマール国立バウハウス”を承認｣(Isaacs, S.206）するよう要請した。すでにこの時点でグロピウスは新たな学校の名前を「バウハウス」と決め、芸術大学教授会にもそれを伝えていたことになる。

3 月 25 日、臨時政府はグロピウスの提案や芸術大学教授会の請願に同意を示し、宮廷庁も 4 月 12 日それを追認した（Wingler, SS.36-37)。1919 年から 1920 年にかけて、ワイマールを中心とするチューリンゲン地方もまた、革命的な雰囲気の中にあり、事実、1920 年 6 月のチューリンゲン・ラント議会選挙では独立社会民主党、社会民主党、民主党など左派勢力が保守派を圧倒する状況であり、この時期においてこそ、近代派グロピウスをワイマールに迎える気運もみなぎっていただろうし、それゆえバウハウス設立がとんとん拍子に進んだに違いない。

この時点からグロピウスはバウハウスを学校として体裁を整えるために全力疾走する。1919年4月にはバウハウスの創立宣言を書き上げた。手工芸 Handwerk を通じた建築家・彫刻家・画家の自己形成、すなわち手工芸と芸術の統一を謳い、この造形活動を建築へと収れんさせて「あらゆる造形活動の最終目標は建築である」と宣言した。この創立宣言を発端にして、グロピウスにおける手工芸と芸術の統一という「理念」を読み解こうとする試みもあるが（杉本俊多、1979 年)、それよりも、この学校が芸術大学と工芸学校を合併したものであったという単純な事実がまずあり、それをグロピウスが創立宣言に理念化した苦心を見る方が分かりやすい。またこの学校の二人マイスター制（一部門に形状マイスターと手工芸マイスターを併存させる制度）も同様で、その教育システムの革新性を論じる場合、その背景を抜きに語ることはできない。芸術大学の教員と工芸学校の親方を一つの学校の教員として引き継ぐ以上、各部門に二人の教員を置く工夫、その場合、一方を「教授」とし、他方を「親方」として身分的な差別をしないように、ひとしなみに「親方」とする工夫、このグロピウスの苦心を先に見るべきである。さらに手工芸重視を表明することは、当時のワイマールにおける伝統的な商工業者への配慮もあったはずである。実際、1916 年の大公およびフォン・フリッチュへの建白書にも、彼は作業場教育を行おうとする来るべき学校が同地の商工業者のライバルにならないような配慮をしていたのだった。その上で、建築と手工芸・芸術の統一というグロピウスの理想を、この創立宣言から読み取ることは可能であろう。

だがしかし、芸術大学と工芸学校の合併という現実の前で、当初グロピウスの理想は簡単には実現できなかった。教育システム内に「建築学」の部門を設置できなかったのである。結局、バウハウスの組織とは別に、グロピウスは同僚のアドルフ・マイアーをワイマールに呼んで、私的な建築事務所を置くことになる。これはデッサウ・バウハウスでも同じだった。とはいえ、グロピウスは単に既存の芸術大学と工芸学校の単なる合併としてバウハウスを設立することなど最初から考えてはいなかった。それは彼が校長として新たに招く余地のある教員は、いずれも伝統主義とは無縁なタレントの持ち主ばかりだった。しかも彼が単に手工芸や芸術を建築学の侍女と見なす人物ではないことを物語っている。

彼が招いた教師陣の中で、最初の収穫はヨハネス・イッテン（1888-1967）であろう。グロピウスはバウハウス設立に向けて奔走しているさなか、妻アルマと愛人ヴェルフェルのいるウィーンを短期間訪れ、3 歳の娘マノンとも再会した。そのときアルマのパーティで、偶然ヨハネス・イッテンと出会った。そのころ前衛画家イッテンはウィーンで絵画学校を開いていた。当然グロピウスはバウハウスの構想をイッテンに開陳したことだろう。こうして彼はイッテンをワイマールに招くことができた。このイッテンこそバウハウスの教育システム、すなわち予備教育課程を設置して、そこで素材研究・形態想像力などを発展させ、同時に芸術家・工芸家

としての感性を養うシステムを発案した功績を残した。この予備教育課程は、教育システム全体の中での重要度において変化はあるものの、その後のバウハウス教育システムに受け継がれる。しかしイッテンは工業あるいは市場とバウハウスとのつながりを当然とするグロピウスの考えと容れず、1923 年にバウハウスを去る。この興味深いバウハウス功労者については、彼の東洋的神秘思想を含めて、本稿とは別に考察するに値する。

グロピウスが招いたその他の芸術家は、設立当初にライオネル・ファイニンガー（1871-1956）、ゲアハルト・マルクス（1889-1981）、設立後 1920 年からあの「ハウス・アム・ホルン」の設計をしたゲオルグ・ムッヒェ（1895-1987）、1921 年からパウル・クレー（1897-1940）、オスカー・シュレンマー（1888-1943）、舞台工房を担当したローター・シュライヤー（1886-1966）1922 年からワシリー・カンディンスキー（1866-1944）、あるいは 1923 年からヨハネス・イッテンに代わって基礎課程を担うラズロ・モホリ＝ナギ（1895-1946）など前衛芸術の最前線で活躍するメンバーばかりだった。このハンガリー生まれのユダヤ人モホリ＝ナギは、ナチの政権奪取後、グロピウスと同じ行程（イギリスからアメリカ合衆国へ）を辿り、1937 年に短期間ながらシカゴに「ニューバウハウス」を設立した。

なお、このワイマール・バウハウスで学んだ学生の中にはマルセル・ブロイヤー（1902-1981）のような才能豊かな若者がいた。彼もハンガリー生まれのユダヤ人で、バウハウス時代にはワシリー・チェアー（写真２）をデザインした。この椅子は現在バウハウス（校舎）の至る所に置いてある。彼もまたナチ台頭後、ロンドンからアメリカに渡り、1941 年までグロピウスの公私にわたるパートナーであり、その後も建築家として活躍した。また女子学生よりなる織物部

写真 2　バウハウス校舎内のワシリー・チェアー（筆者撮影）

門で学び、その後手工芸マイスターとなるグンタ・シュルツェル（1897-1983）や、バウハウスの金属工房で多くの金属器をデザインしたマリアンネ・ブラント（1893-1983）など数は少ないが女性も散見する（Droste 1990, SS. 242-253）。

1919 年、第一次世界大戦直後の「変革」の気運が横溢するドイツの、しかしその背後にそれを敵視する保守派がいなくなったわけではない地方都市ワイマールで、芸術文化の変革を体現するかのごときバウハウスがスタートしたのだった。

バウハウス開校直後の 5 月、妻のアルマと娘マノンがワイマールを訪れた。しかし彼女たちは 1 ヶ月滞在しただけで、ウィーンへと帰っていった。翌年 5 月、もう一度二人はワイマールを訪れるが、それが最後だった。1920 年 10 月、グロピウスとアルマは離婚した。その後グロピウスはハノーバーでの講演の際に聴衆の中にいた一人の女性を見そめた。イルゼ・フランク当時 26 歳（1983 年没）、ハノーバーの書店で働いており、すでに婚約者と一緒に暮らしていた。結局、彼女はグロピウスを選び、1923 年 10 月に結婚し、イーゼ・グロピウスと改名して生涯の伴侶となる。

この二人の交際時期と重なる 1923 年 8 月 15 日から 9 月の終わりまで開かれたバウハウス展覧会は、その創立時の清新な雰囲気を表現したものだった。校長グロピウスはその直前のゼメスターすべてをこの準備のためにつぎ込んだ。この展覧会は旧来の芸術大学と工芸学校の単なる合併したものではないことを知らしめるに充分だった。グロピウスがアドルフ・マイアーやハンガリー出身のフレッド・フォーバート（1897-1972）とともに建築事務所で設計した積み木住宅の展示、ハウス・アム・ホーン（写真３）の建築、これらは建築部門のないバウハウス展

写真 3　ワイマールのハウス・アム・ホーン　1923 年（筆者撮影）

覧会で展示されたのである。その他、グロピウスやカンディンスキーの講演や、さらには前衛的なダンス、学生たちの前衛的な芸術オブジェの展示などであった。この展覧会は、当時の活気にあふれたバウハウスの様子を推し量ることができるし、実際に多くの来訪者にとっては好評であったが、他方で保守派の反発と無理解を招いたことも容易に想像がつくし、事実そうであった。

ちなみにハイパーインフレーションのさなかに行なわれたこの展覧会の目玉の一つハウス・アム・ホーン建設の資金繰りはベルリンで手広く建築会社を経営していたユダヤ人アドルフ・ゾムマーフェルトによる。1921 年、バウハウスの最初の作品であるあのゾムマーフェルト邸の施主である。彼はドイツ時代のグロピウスのパトロンであり続けた。

バウハウスが全力を挙げて実施したこの展覧会の翌年（1924 年)、チューリンゲン・ラント議会選挙において右派勢力が多数派となった。右派勢力はバウハウスを予算面で締め上げ、閉校を余儀なくさせる。幸い、アンハルト州デッサウ市から招聘され、バウハウスは 1925 年より、デッサウに移転することになった。ワイマール期からナチ時代を経て戦後まで共産主義者でも社会主義者でもない、生粋の自由主義者（ドイツ民主党員）であるデッサウ市長フリッツ・ヘッセ（1881-1973）が招聘のイニシアティブを執り、彼はデッサウ時代のバウハウスを最後まで支えようとした。

1925 年から 1932 年までのデッサウ・バウハウス時代、市内にはファグス工場の建物を彷彿とさせるグラスウォールのシンボル的な校舎（写真４)、グロピウス用の住宅（現在はない）と 2 家族用マイスターハウス 3 棟（現在ミュージアム)、あるいは円形空間を組み込んだ市内の職

写真４　デッサウのバウハウス校舎　1925/26 年（筆者撮影）

写真５　デッサウ・テーテン低層集合住宅　1926/28 年（筆者撮影）

業案内所とエルベ川沿いのレストラン「コーンハウス」、テーテン低層集合住宅（写真５）（これらは現在も使われている）など、数々の「モデルネ」建築物が残された。もちろんこれは市の公的資金によってこそ可能であった。

このデッサウにおいても、建築を頂点とした芸術と工芸の統一というグロピウスの理念はまだ未完成であった。建築部門は相変わらずグロピウスの個人事務所として教育課程の中に正規には組み込まれていないのである。1928 年初頭、突然グロピウスはバウハウス校長辞任を表明した。その後任者、1928 年夏ゼメスターから 1930 年 8 月までのハンネス・マイアー（1889-1954）と、1930 年冬ゼメスターから 1933 年 7 月の閉校まで（1932 年 10 月から閉校まではベルリン・バウハウス）ミース・ファン・デア・ローエ（1886-1969）の時期に、バウハウスは建築部門を中心に据えた教育課程へと純化していく。ただし、本稿の課題であるグロピウスの生涯を概観する範囲を超えるので、その詳細についてはここでは触れることができない。

それにしても筆者には、はたしてグロピウスがどのような学校を「造形」しようとしていたのか、まだ鮮明ではない。デッサウ移転をきっかけにして、やろうと思えば建築学を中心に置いてインテリア・デザイン部を脇に従える教育課程へと改変可能だったろう。しかし彼はそこまでやろうとはせず、相変わらずカンディンスキー、クレーを重用し、舞台芸術や前衛ダンスを包摂し続けた。デッサウ・バウハウスのシンボルである校舎は採光を重視したアトリエ棟、教室棟、両棟連結部に事務管理部門、アトリエ棟と学生寮棟の連結部に食堂と講堂を有する複合建築物であるが、講堂の舞台部分は食堂と可動式の間仕切りになっており、バウハウスが好んだ祝祭になると間仕切りが取り払われて様々な催し物ができるようにしてある。「モデルネ」

を志向した建物の中に、自由な祝祭空間を併存させるのがグロピウスの意図だったのだろうか。そうだとすると、建築を頂点とした芸術と工芸の統一という彼の理念は、少なくとも建築学にすべてを従わせる合理的「学校」を目指したものではなかったのだろうと思わざるをえない。そしてそれこそがグロピウスの良き「混沌」ではないだろうか。

３．バウハウス後のグロピウス

1928 年 3 月 25 日、バウハウスでのグロピウス壮行会の後、グロピウス夫妻は 2 ヶ月間のアメリカ旅行に出発した。資金はある財団とアドルフ・ゾムマーフェルトからの支援を受けた。ゾムマーフェルト夫人の兄弟がアメリカに住んでいたので、この夫人がグロピウス夫妻に同行することになった。ベルリンで壮行パーティが、ワイマール時代のバウハウスの作品である木造のゾムマーフェルト邸で行なわれた。そこには当時のプロイセン首相オットー・ブラウン、ベルリン市の建築顧問マルティン・ヴァーグナー（1885-1957）らが同席した。すでにグロピウスの名声がどの程度のものとなっていたかを推し量ることができるだろう。なお、マルティン・ヴァーグナーは現在世界遺産になっているベルリン市内の「馬蹄型集合住宅」(Hufeisensiedlung) をブルーノ・タウトとともに設計した都市計画・建築家で、グロピウス、あるいはフランクフルト・アム・マインの住宅建設（レーマーシュタットの集合住宅）に寄与したエルンスト・マイ（1886-1970）と並ぶ、ワイマール期のドイツにおける「新建築」様式を担った代表的人物である。社会民主主義者であった彼は、ナチの政権掌握後、1938 年以降アメリカでグロピウスの助力によってハーバード大学に職を得て、グロピウスの同僚として働くことになる。

アメリカ旅行から帰国したグロピウスは、ベルリン市内に新居兼事務所を構えた。ここで働いていた 20 人のスタッフの中には短期間ではあるが一人の日本人山口文象（1902-1978）がいた。彼は 1931 年 7 月頃よりグロピウスの建築事務所で製図の仕事に就いたが、1932 年 7 月には帰国しており、帰路にはヨーロッパ各国を回っているので、実際にグロピウスの事務所で働いた期間は短かったようである。

1933 年 1 月、ヒトラーが首相となりナチが政権を掌握した。ちょうどそのとき、グロピウスはソヴィエトに講演旅行に出かけており、彼が帰国したのはナチの政権掌握の 5 日後のことだった。同年すぐに従来の非ナチ組織を解体しナチへ同化する政策グライヒシャルトゥングが始まり、ドイツ工作連盟もその対象となった。6 月の連盟幹部・委員会議において工作連盟のメンバーの「浄化」とローゼンベルクの「ドイツ文化のための闘争同盟」への編入について採決がなされ、27 対 3 でこれが決議された。反対票 3 は、グロピウス、マルティン・ヴァーグナー、それにヴィルヘルム・ヴァーゲンフェルトであった。ヴァーゲンフェルトは 1923 年以来バウハ

ウスで学び、1930 年からはバウハウスの金属加工マイスターを務めていた人物である。これによりグロピウスとマルティン・ヴァーグナーは幹部職を辞任し、ヴァーゲンフェルトは連盟を脱退した。（Isaacs, S.625）

1933 年 7 月にはベルリン・バウハウスは閉校を余儀なくされた。もはや「新建築」の旗手たちには、ドイツに居場所はなくなってきた。ブルーノ・タウトは日本（のちトルコ）へ、エルンスト・マイはケニアに、マルティン・ヴァーグナーはトルコ（のちアメリカ）へと出国していった。バウハウスのメンバーでは、すでにマルセル・ブロイアーがロンドンに、そしてラズロ・モホリ=ナギもドイツを出国していた。グロピウスも出国の機会を探った。

1834 年 5 月、グロピウスはイギリスの建築家団体から招待されロンドンとリバプールへの講演旅行に出かけた。このときイギリスにおけるグロピウスの紹介者であった建築家フィリップ・モートン・シャンド（1888-1960）、近代家具のデザイナーであり、家具の会社を経営していたジャック・プリッチャード（1899-1992）、近代建築を手がけていた建築家マックスウェル・フライ（1899-1987）らがグロピウスのために尽力した。マックスウェル・フライはグロピウスを英国建築家王立協会のドイツ通信名誉会員に推薦し、またイギリスでの仕事の協力者として迎え入れる用意があることを約束した。またプリッチャードは、すでにマルセル・ブロイアーを雇い入れており、グロピウスのために住居や労働許可の手配をしてくれることになった。こうしてグロピウスはドイツを出国し、イギリスに移り住む目途をつけた上で、機会を待った。

1834 年 10 月、グロピウスはイタリアのアレッサンドロ・ヴォルタ財団主催の劇場に関する国際会議に招待された。この会議には約 20 カ国から著述家、作曲家、批評家、舞台芸術家、建築家、国立劇場関係者などが出席した。これがその機会であった。会議終了後、グロピウス夫妻はドイツに帰国せず、スイス経由でイギリスに渡ったのである。

だが、グライヒシャルトゥングに反対し、イギリスに渡ったからといって、グロピウスが「断固たる反ナチズム」を志向し、イギリスに「亡命」したという想定は早計に過ぎる。ギルバート・ルプファーGilbert Lupfer とパウル・ジーゲル Paul Sigel による『Gropius』（Taschen, 2004, Köln）では次のように述べている。「変化した情勢へのグロピウスの反応はアンビバレントなままであった。一方で彼は一定の活動の自由を保持しようとする者たち、たとえばドイツ工作連盟のグライヒシャルトゥングに反対する者たちの一人に属していた。他方で彼はザハリッヒに機能する合理主義をナチズム体制の表現形式として宣伝する可能性ありとはっきり見ていた。1934 年 6 月の帝国文化省大臣に宛てた一通の手紙の中で、彼は建築上のモデルネの新のドイツ的性格を強調していた。」そしてまたイギリスに行ったのも、「グロピウスにとって当初は亡命とは見なされておらず、むしろ単に一時的な活動舞台の移転と見なされていたにすぎなかった。ドイツとのつながりと、ナチズムの元手より大きな注文を得るという期待はまだ強かったのであ

る」(L.Gilbert u. S. Paul, S.13.)。

この点に関して、ナチズムとバウハウスとの関係を批判的に論じているネルディンガーは、グロピウスの態度をより厳しく指摘している。すなわち「グロピウスは一方では、マルティン・ヴァーグナーやヴィルヘルム・ヴァーゲンフェルトとともにドイツ工作連盟の統制(Gleichschaltung)に反対をし、造形美術院の院長オイゲン・ヘーニッヒと、工作連盟およびドイツ建築家連盟の会長であるカール・クリストフ・レルヒャーに手紙を書いて、近代建築の擁護を訴えている。だが他方では、この手紙そのものがイタリアの先例に倣って、モデルネを「ドイツの」芸術として確立しようとするグロピウスの願望の証ともなっている」(Nerdinger, S.154. 邦訳 146-147 頁)というのである。さらにネルディンガーは多くのバウハウスラーがナチに近づこうとした事例を挙げるとともに、グロピウスが 1934 年にナチのプロパガンダ展覧会「ドイツ国民－ドイツの労働」へ参加したことを指摘し、彼が決然たる反ナチ主義者ではないことを論じている。またイギリスへの渡航についてもルプファー／ジーゲルと同様、「1934 年秋のグロピウスのイギリスへの移住は、まず第一に経済的理由によるものである。しかも、1935 年と 36 年には彼は何度もドイツに戻って来ている。したがって彼の移住に関しては、逃亡とか保護は確かに当てはまらない」(ebd. S.157, 同 148 頁)と述べている。またグロピウスの自由主義的・社会主義的思想の中に潜む伝統主義を指摘する論者もいる(Claussen, SS.80-82)。

アイザークスは、この問題については控えめに次のような事実を紹介するにとどめている。すなわち 1934 年 5 月、グロピウスはイギリスで講演を行なったが、「この講演は Royal Institute of British Architects の Journal に載り、彼はその抜き刷りをドイツに送ってもらうよう友人にリストを渡したが、そこには先頭にヨーゼフ・ゲッペルスの名があった」(Isaacs, S.681)。

それはさておき、ロンドン滞在中グロピウスはマックスウェル・フライと協同で、集合住宅や学校施設の設計を行うことができた。実際に建てられた二人の代表的な共作は 1936 年のレヴィ邸(ロンドン)、同年フィルム会社のラボラトリウム、1936/37 年インピングトン学校(ケンブリッジシャー)などがある(Berdini1984, SS.132-151)。一方、彼の人生上での特筆すべき事件としては、1935 年 4 月にウィーンの娘マノンが小児麻痺の発病をきっかけにして亡くなったことが挙げられる。一年前に発症した彼女を、グロピウスはイギリス講演旅行後に一度ウィーンに見舞っているが、この度はウィーンを訪れることはなかった。アルマの非難があったのは言うまでもない。もう一つ、彼が若い頃からのパトロンであったアドルフ・ゾムマーフェルトが 1936 年 11 月にテル・アヴィブから手紙をよこした。ユダヤ人であるゾムマーフェルトは 1933 年妻レニーと息子をスイスに置き、一人パレスチナに移住をしていたのだった。ゾムマーフェルトはイギリスの建築会社で働いている別の息子が建築学の教育を続けられるよう、彼の面倒を見てくれるイギリスのユダヤ人家族を紹介してくれるようにグロピウスに頼んできたのだっ

た。グロピウスはすぐにその依頼に応える旨の返事を書いた。5ポンド紙幣を同封し、「あなたのかつての友情は決して忘れません」(Isaacs, S.809)、と書き添えて。第二次大戦後、アドルフ・ゾムマーフェルトは生き延び、ドイツに戻って建築会社を再興することになる。

さらにもう一つ、しかも最も重要な出来事が1936年にあった。同年中頃、ハーバード大学スクール・オブ・デザイン院長ジョセフ・ハドナット Josef Hudnut から招聘のオファーがあったのである。グロピウスは教師よりも建築家として実際の仕事をしたかったようで、この時点では二人の会談には実りがなかった。ハドナットはしかしあきらめなかった。今度はハーバード大学長を引っ張り出し、10月、ロンドンでの交渉の結果、学長は教師と並行して建築家の仕事をすることも受け入れ、話がまとまった。1937年1月、ハーバード大学はグロピウスを教授として招聘することを正式に決定し、これを受けてグロピウス夫妻は1937年3月12日にアメリカに向け、約2年半を過ごしたイギリスを発った。

1937年4月、グロピウス夫妻はアメリカに到着した。この年以降、7年後の1944年の市民権獲得を経て、アメリカ・マサチューセッツ州リンカーンを終の棲家とすることになる。この時期、アメリカにはすでに多くの旧バウハウス・メンバーが移住していたし、これ以後も移住してくる。バウハウス設立時の教師ライオネル・ファイニンガー、ラズロ・モホリ＝ナギ、第三期学長ルードヴィヒ・ミース・ファン・デア・ローエ、バウハウスで学び同校でデザイン部門の教師となったヨーゼフ・アルバース（1888-1976)、同じく同校学生から印刷・広告部門の教師となったヘルベルト・バイヤー（1900-1985)、そしてマルセル・ブロイアーなどである。

モデルネの建築やデザインを志向する彼らがナチズムの弾圧を逃れ、アメリカに活躍の場を求めたことは容易に理解できる。アメリカの側も彼らを必要としていた。なぜそうなのか、とりわけなぜハーバード大学がかくも熱心にグロピウスを招聘しようとしたのか。これについて『グロピウス伝』の著者であり、建築・都市開発の専門家でもあるアイザークスの説明は信頼できる。彼によれば以下のような事情による。

ヨーロッパでは「モデルネ」建築が広がり始めていた1920年代、アメリカ建築界は、古典様式を理想とするフランスのエコール・デ・ボザールの影響がまだ浸透していた。建築学の教育システムにおいても、1865年のマサチューセッツ工科大学の開設、および1874年のハーバード大学における建築学教育の設置に伴う教員も当初はフランス人がアメリカに招かれて教鞭を執るという状況にあった。とはいえ、アメリカでもヨーロッパ建築学の新動向に関心が向かい始めていた。そして1930年代、29年恐慌を経てニュー・ディール政策が開始されるようになると、公的資金による住宅建設プロジェクトもその一環として着手されるようになる。すでに1920年代ワイマール期のドイツでは、社会化政策によって公的資金による低所得者用の集合住

宅建設が計画・実施されていたのであり、それゆえにこそデッサウ市でグロピウスが、ベルリン市でマルティン・ヴァーグナーやブルーノ・タウトが、そしてフランクフルト・アム・マイン市ではエルンスト・マイが活躍の場を得たのだった。そこで新しい材料、新しい建築方式、新しいデザインが生まれたのである。

こうした状況下で、「アメリカの若い世代は、経済危機のもたらした影響に直面し、また改革の熱情に影響されたニュー・ディールの印象の下でーーそしてこの場合、1918 年のドイツにおける敗戦の後に、ドイツで若者を捉えたような新たな出発の雰囲気とよく似た状況を見るのは難しいことではないーー建築家が人間と社会に対する自らの責任をやっと意識しなければならないということを求めた」(Isaacs, S.843)。

さらに住宅に限らず、公的建築物建設のための公的資金による大型プロジェクトは、周辺の地域計画・都市計画の策定を伴うのであり、この分野の専門家であるアイザークスは次のように述べる。「都市建設はしかし建築学教育において完全におろそかにされた。エコール・デ・ボザールはこの領域では何らの手がかりも与えなかった。……もちろん建築事務所には、公園、大通り、大きな広場、工場団地、官庁や学校のための大きな複合施設に関わる場合、交通網建設、港湾改造拡張、架橋計画など直接都市計画の諸条件の影響下にある場合は、都市建設の領域に立ち入るような仕事も生じた。しかし製図板の上に現れるもの、それはおそらくローマ的な設計だろうが、現存する近隣関係、現存する社会的経済的事情のようなその時々の特殊性の考慮は、ほとんどない」(Isaacs, S.839)。

このような時代状況に対応した新たな建築学教育の再編が求めらたとき、ジョセフ・ハドナットがハーバードの組織と教育改革を進めた。まず建築学と地域計画と風致造形の三つの学部を、スクール・オブ・デザインへと統合した。そして、そこに指導的な役割を果たす人物が必要だった。それがグロピウスだったのである。

一方、シカゴでも建築学改革の同様の動きがあった。ここでの推進主体は大学ではなく芸術・工業協会であり、同協会はグロピウスのアメリカ到着後、新たなデザイン学校の設立の相談を持ちかけた。グロピウスはハーバード大学との契約があるので、モホリ＝ナギを推薦した(Wingler 1968, S.198-199 グロピウスの同協会スタール夫人宛の手紙)。こうしてモホリ＝ナギはイギリスからアメリカに移住し、彼を学長としてアメリカン・スクール・オブ・デザイン、別名「新バウハウス」が 1937 年 10 月 18 日に開校した。しかしこの学校は資金上の問題で 1938 年 9 月に閉校になった。モホリ＝ナジはその後 1939 年 2 月に School of Design を自分で資金を工面して開き、1944 年以来 Institute of Design として存続させたが、(利光功、205-214 頁)この多才なデザイナーは 1946 年シカゴで亡くなった。

グロピウスは新しい生活を開始する忙しさの中で、モホリ＝ナギだけでなく、アメリカに渡っ

てきた多くの昔の仲間の面倒に労を惜しまなかった。彼の推薦によってマルセル・ブロイアーは 1937 年にハーバード大学の研究員（リサーチ・アソシエイト）に、ヘルベルト・バイアーは 1938 年ニューヨークのモダン・アート美術館に職を得た。またマルティン・ヴァーグナーもハーバード大学の助教授となることができた。

さて、グロピウスはハーバード大学との当初の合意通り、一方で教鞭を執りながら、個人的な建築事務所を開設した。大学では、特にデッサン、スケッチ、製図 Zeichnung を重視した授業を行なったが、彼自身がその模範を示すことはなく、マルセル・ブロイアーが彼を補佐した。個人事務所の方では、ドイツ時代のアドルフ・マイアーの役割をマルセル・ブロイアーが果たした。しかし 1941 年 8 月、このマルセル・ブロイアーは、ちょっとしたきっかけでバウハウス以来 20 年にもおよぶパートナーシップの解消をグロピウスに突きつけた。ブロイアーにとって恩師であるグロピウスとのパートナーシップは、同時に自分が常に陰であり続けることを意味したのであろうか。彼はニューヨークで独立し、戦後も一人の建築家として活躍し続けた。

グロピウスの次のパートナーはドイツ生まれのユダヤ人コンラート・ヴァクスマン（1901-1980）である。彼もまたグロピウスに救われた人物であった。1939 年 1 月、アルバート・アインシュタインからグロピウス宛てに手紙が届いた。彼はワイマール・バウハウスが組織していたバウハウス友の会の会員であった。手紙の内容は、アインシュタインのポツダムの私邸を設計したフランクフルト・アン・デア・オーデル出身の建築家ヴァクスマンが、ドイツからフランスに逃れていたところ、フランスがドイツに占領されたことによって、フランスの収容所に入れられており、その救出の協力を依頼するものであった。グロピウスは手を尽くし、かつてベルリンの実家と親交のあったフランス人政府関係者と連絡を取り、ヴァクスマン救出を頼んだ。それがやっと 1840 年になって成功したのだった。同年、アメリカに渡ってきたヴァクスマンをグロピウスは自分の個人事務所に雇い入れた（Isaacs, S.889）。彼らの最初の共同作業は、事前に仕上げられた部品によるプレハブ住宅建築のための新たなコンセプト、すなわちジェネラル・パネル・システムあるいはパッケージド・ハウス・システムの考案であり、そのための特許申請とジェネラル・パネル会社設立を計った。

1945 年、第二次世界大戦が終わり、グロピウスは新たな仕事上のパートナーを見出した。戦後すぐにハーバードでの教え子たちがグロピウスに共同建築事務所の設立を提案してきた。これが The Architects Collaborative (TAC) である。戦後のグロピウスが関わる建築の設計はほとんどがこの TAC スタッフとの共同によるものである。晩年、多くの設計者が関わったニューヨークのパンナム・ビル（現メットライフ・ビル）の設計においても、あるいはベルリンのバウハウス・アルヒーフのデザインの際にも、常にグロピウスは TAC と共同で設計者として名を連ね

た。

こうしてグロピウスは戦後もハーバード大学で教師として仕事を続けるともに、TAC と共同で設計事務所を運営していたが、他方で 1947 年の夏にはアメリカ軍の依頼によりドイツの戦後復興計画のアドバイザーとしてドイツに 1 ヶ月滞在するなど、相変わらず多方面で活躍を続けた。そして 1952 年 7 月 69 歳のグロピウスは退職期限を 1 年残してハーバード大学を退職した。この退職は、必ずしも円満退職ではなく、当時建築学科長であったグロピウスが、大学当局の予算削減策に伴う教員スタッフ数削減に抗議の意味を込めたものであったらしい（Isaacs, SS.991-994）。

退職後の 1954 年、グロピウス夫妻はほぼ世界一周の旅行を行なった。日本を訪問したのはこのときである。その前年、国際文化会館専務理事だった松本重治がアメリカの知人のつてを頼ってグロピウスの日本招致に動いた。これを機に、国際文化会館設立支援をしたロックフェラー財団の東西文化交流プログラムによって、グロピウスの訪日が可能になった。同時期にオーストラリア王立建築協会からの招聘が重なり、グロピウス夫妻の旅程はオーストラリアを経て来日ということになった。1954 年 5 月に日本に着いたグロピウス夫妻は、バウハウスの学生だった水谷武彦（1898-1969）、山脇巌（1898-1987）・道子夫婦、ベルリンのグロピウス建築事務所で働いたことのある山口文象、またバウハウスを訪問したり、グロピウスに直接会ったことのある石本喜久治（1894-1963）、仲田定之助（1888-1970）、大内秀一郎（1892-1937）、藏田周忠（1895-1966）、山田守（1894-1966）らに会うことができた。彼らはいずれも戦前にバウハウスを日本に紹介した人々であり、戦後日本の建築界で活躍した建築家であった（梅宮弘光編『建築』、山野英嗣編『デザインとバウハウス』参照）。

グロピウスは日本滞在中、共立講堂で 4 回の講演を行い、さらに日本各地を訪れた。特に京都ではブルーノ・タウトと同様に桂離宮を訪ね、広島では丹下健三（1913-2005）を伴い彼の設計によってできたばかりの広島平和記念公園を訪れている。

日本滞在後、グロピウス夫妻は 1954 年 8 月初めに日本を発ち、香港からバクダッド、カイロを経て、ハノーバーから大西洋を渡ってアメリカに帰った。

晩年、彼の業績に対し、多くの顕彰を受け、平穏な日々を送っていたグロピウスは、1969 年 6 月 7 日、甲状腺の炎症による高熱で入院し、6 月 25 日、手術を受けた。しかし術後に肺出血を起こし、7 月 5 日、早朝に死去した。86 歳の誕生祝い（5 月 18 日）から 1 ヶ月半のことだった。

最後に彼の最後の作品、ベルリンのバウハウス・アルヒーフについて触れておく。もともとこのアルヒーフは 1960 年にダルムシュタットに開設された。しかしミュージアムとしては展示場所が限られていたので、別途広いスペースの独自施設を建設する計画が持ち上がり、1965 年

にグロピウスと TAC が建物の模型を作成した。1968 年、ルートヴィヒ・ミース・ファン・デア・ローエの最後の作品であるベルリンのノイエ・ナショナルギャラリー完成祝いの食事会が、グロピウス夫妻の出席を得て催されたとき、ベルリン市の方からダルムシュタットのアルヒーフ代表者にバウハウス・アルヒーフのベルリン移転が打診された。

1969 年にグロピウスが亡くなった後、この交渉がまとまり、アルヒーフはベルリン・シャルロッテンブルクに移転され、その後、建物が前述の模型を原型として 1979 年 12 月に完成した（Isaacs, SS.1098-1100）。ベルリン市のリュッツォウ・プラッツに近い運河沿いに、その個性的な姿で現在も立っている。運河沿いを文化フォーラムの方向へ 10 分ほど歩くと、そこにはミース・ファン・デア・ローエの設計したノイエ・ギャラリーがある。

以上、ワルター・グロピウスの生涯を概観してきた。グロピウスが論じられるとき、バウハウス時代に中心が置かれ、その前後の時代に触れられることの少ない傾向の中で、彼の生涯を概観することは意味のあることだと思われる。しかし近代建築を言葉で表したグロピウスについて、本稿では彼の近代建築の思想そのものには立ち入っていない。すでに様々な資料は公刊されており、特に Hartmut Probst と Christian Schädlich の "Walter Gropius, Bd,3, Ausgewählte Schriften" などはグロピウスの書いたものや講演録を編んだ好資料である。これらを用いた作業は、今後の課題としたい。

※本稿は 2006 年度専修大学個人研究助成によって可能となった。記して謝す。

参考文献

Berdini, Paolo 1984, "Walter Gropius", Aus dem italianischen übersetzt von Hilla Jürissen, Verlag für Architektur Artemis, Zürich , München.

Claussen, Horst 1986, "Walter Gropius, Grundzüge seines Denkens", Georg Olms Verlag, Hildeshaim/Zürich/New York.

Droste, Magdalena 1990, "bauhaus 1919-1933", Taschen, Köln, 『バウハウス 1919-1933』Mariko Nakano 訳、2002 年

フランソワーズ・ジルー・山口昌子訳『アルマ・マーラーーウィーン式恋愛術ー』、河出書房新社、1989 年

Isaacs, Reginald R. 1984, "Walter Gropius, Der Mensch und sein Werk Bd.1-2", 1983, Berlin.

Lupfer, Gilbert / Sigel, Paul 2004, "Gropius, 1883-1969, Propagandist der neuen Form", Taschen, Koeln

村上俊介 2007「バウハウスにおける反・反近代の意味」、桑野弘隆・山家歩・天畠一郎編『1930 年代・回帰か終焉か』(社会評論社)

Nerdinger,Winfried 1993, "Bauhaus-Architekten im <Dritten Reich>", in "Bauhaus-Moderne im Nationalsozialismus － Zwischen Anbiederung und Verfolgung", W. Nerdinger (Hg.), Prestel-Verlag, München.　清水光二訳『ナチス時代のバウハウス・モデルネ』、大学教育出版、2002 年

利光功 1988、『バウハウスー理念と歴史ー』、美術出版社

杉本俊多 1979、『バウハウスーその建築造形理念ー』鹿島出版社

梅宮弘光編・和田博文監修『コレクション・モダン都市文化 42　建築』(ゆまに書房、2009 年)

Wingler, Hans M. 1968, "Das Bauhaus, 1919-1933, Weimar, Dessau, Berlin, und die Nachfolge in Chicago seit 1937", 5. Auflage DuMont Literatur und Kunst Verlag, Köln, 2005.

Weber, Helmut 1961, "Walter Gropius und das Faguswerk", Galwey, München.

山野英嗣編・和田博文監修『コレクション・モダン都市文化 44　デザインとバウハウス』(ゆまに書房、2009 年)